

平成 21 年 9 月 28 日現在

研究種目：基盤研究 (C)  
 研究期間：2007～2008  
 課題番号：19520073  
 研究課題名 (和文) 近代以前イスラーム社会における知識人の再生産に関する総合的研究

研究課題名 (英文) A Synthetic Study of Reproduction of Intellectuals in the Pre-modern Islamic Society

研究代表者  
 竹下政孝  
 東京大学・大学院人文社会系研究科・教授  
 研究者番号：30163398

## 研究成果の概要：

近代以前イスラーム社会の知識人再生産五つの場 (マドラサ、タリーカ、カーティブ層、モスク、個人的集団) のデータ・資料収集および、データ、資料の分析を行った。できるだけ具体的な、個人レベルでの師匠と弟子の関係——弟子の側がどれだけの師匠についてか、ある師匠に師事したときに何をテキストにして勉強したのか、師匠が何を書いたのか、あるいは書いていないのか、弟子が何を書いたのか、あるいは書いていないのか、師匠が書いたものと弟子の書いたものと連関はあるのか、書かれているなかで誰が言及されているのか——のデータを蓄積した。以上のデータ収集と平行し、それぞれの研究者の分担の範囲で、イスラーム知識人の思想の変容を明らかにする論文を執筆した。

## 交付額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
19 年度	1,700,000	510,000	2,210,000
20 年度	1,700,000	510,000	2,210,000
年度			
年度			
年度			
総計	3,400,000	1,020,000	4,420,000

研究分野：哲学

科研費の分科・細目：思想史

キーワード：イスラーム

## 1. 研究開始当初の背景

われわれは 2005 年度～2006 年度科学研究費補助金基盤研究(C)において「近代以前イスラーム社会における権威的テキストの発生・伝播・注釈に関する総合的研究」と題し、12、3 世紀にそれから以降、注釈が

連綿と付されていくような権威的テキストが発生していることに着目し、その特色を洗い出そうとした。そこで注目されたのは、各学問で成立する権威的テキストが他の学問の権威的テキストとどのように連関するか、また権威的テキストに付される注釈にどの程度、他の学問の影響が入ってくるの

か、といういわばテキスト間の連関をさぐる試みであった。

通常、われわれはなんらかの分野、学問を、ターゲットにして研究せざるをえないが、その研究分野を超えて何か基盤となるものを作れないか、という試みでもあった。具体的には、イスラーム世界における、クルアーン解釈学・文法学・神秘主義（タサウウフ）・哲学など諸学の関係、それを軸にしたスンナ派・シーア派など諸分派の関係およびスペイン・北アフリカなど西のイスラーム世界、中東のイスラーム世界、中国にまでいたる東のイスラーム世界の関係を問うた。

だが上記研究期間中にある疑問が生じ、それが今回の研究テーマと密接に関係する。テキスト、あるいは、書かれたもの、として浮上してくる知の形態とは特殊な知の形態なのではないか、という問いである。端的な例を挙げよう。イスラーム神秘主義の、特に、前近代の活動をみる際にはテキストによらざるを得ない。しかも彼らがどのように考えていたのかを探るには、スーフィー自らが「書いた」テキストが第一次資料となる。だが伝記（マナーキブ）類を読み解けば、そのように「書く」スーフィーは極めて特殊な存在であることがわかる。そもそも世俗から超越したスーフィーは書くという発想すらないであろう。また「書く」対象となるスーフィーもおのずと限定される。このとき、書かれる/書かれない、という二分法が「知」の制度化に寄与していることが垣間見られるのである。先の研究ではテキストを対象としていたのだが、そうした場合、「書く」対象とならないスーフィーが抜け落ちていってしまうことになる。現在、われわれの手元にあるテキストはいわば勝者の歴史をあらわしているにすぎないのだ。権威的テキストの研究を志したわけだが、権威的テキストだけに注目するならば、その裏側にある、書かれなかった側面が抜け落ちてしまうという難点が残ったのである。もう少し概括的に言うなら、「知」が継承される過程で、テキストとして残るのは一部分であり、テキストに残る部分は「知」の継承のある要素にすぎないだろうということである。

ではどのようにすればその難点が克服できるのか。今回の研究テーマが解決の一つの方途であろうと考えられる。「知識人の再生産」という語句がそれにあたる。

## 2. 研究の目的

本研究の目的は、イスラームにおける知を五つの場、つまりマドラサ、タリーカ、カーティブ層、モスク、個人的集団に分類し、これら理念的な五つの知識人再生産の場を、権威的テキストの発生・伝播と重ね合わせることである。このとき近代以前中世イスラーム社会の知識人の再生産においてテキストの役割が、どの程度のものであったか、具体的には「書く」「書かれる」「書かない」「書かれない」などの基準に照らしながら、一つには知識人の再生産とはどのようなものであったかが、ある程度明確化されるだろうし、一つには、知識人の再生産における権威的テキストの役割がどのようなものであったかも逆に明らかになる。

12、3世紀以降近代以前の学問形態を問うのは、一つにはこの時代の研究が各学問分野において手薄であり、研究がなされているとしても局所的なものに限られるので、なんとかこれからの研究の基盤となるものを作りたからである。さらに、「近代以前」と銘打つのは、近現代におけるイスラーム世界というものを理解するためにその直前までの時代の理解が役立つだろうとの希望をもってのことである。

## 3. 研究の方法

研究代表者の竹下がスーフィズム（タリーカ）、地理的には中東、トルコを中心に受け持った。研究分担者の鎌田はシーア派および神学、地理的にはイラン、柳橋は法学（マドラサ）、地理的には中東、北アフリカ、スペイン、青柳は神学、地理的には中東、エジプトを受け持った。

具体的には、研究代表者の竹下政孝は、存在一性論学派のクーナウィーとファナーリーの存在論、研究分担者の鎌田繁は、シーア派のアッラーマ・ヒッリーとムウタズィラ学派の思想家の正義論、柳橋博之は、スンナ派法学派のひとつ、ハナフィー法学派の法学者たちによる『イブン・ハナフィー賛』、青柳かおるは、初期のスーフィー、マッキーとマッキーから大きな影響を受けたガザーリー、さらに現代の法学者、カラダーウィーの婚姻論を、それぞれ分析・比較した。

そして、限られた分野および思想家のテキストではあるが、時代的に前後するイスラーム思想家のテキストにおいて、「書く」

「書かれる」「書かない」「書かれない」言説はどのようなものだったのかを明らかにした。そして、権威的テキストの継承や、後世の思想家による独自性について考察を深めた。

#### 4. 研究成果

以上の担当において、知識人再生産五つの場(マドラサ、タリーカ、カーティブ層、モスク、個人的集団)のデータ・資料収集および、データ、資料の分析を行った。できるだけ具体的な、個人レベルでの師匠と弟子の関係——弟子の側がどれだけの師匠についたか、ある師匠に師事したときに何をテキストにして勉強したのか、師匠が何を書いたのか、あるいは書いていないのか、弟子が何を書いたのか、あるいは書いていないのか、師匠が書いたものと弟子の書いたものと連関はあるのか、書かれているなかで誰が言及されているのか——のデータを蓄積した。以上のデータ収集と平行し、それぞれの研究者の分担の範囲で、イスラーム知識人の思想の変容を明らかにする論文を執筆した。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 16 件)

1. 竹下政孝「「マスナヴィー」からの物語」『中東協力センターニュース』 査読無 33 巻 2 号、2008 年、50-54 (査読無)

2. 竹下政孝「イスラームの暦と年中行事」『中東協力センターニュース』 33 巻 5 号、2008 年、50-54 (査読無)

3. 竹下政孝「サドルッディーン・クーナウィーのイスラーム哲学史上の位置」『哲学』 No. 59、2008 年、61-76 (査読無)

4. 竹下政孝「サドルッディーン・クーナウィーの人間論」『アジア遊学』 110、2008 年、38-46 (査読無)

5. 竹下政孝「イスラームの聖者マウラーナー・ジャラルッディーン・ルーミー」『中東協力センターニュース』 32 巻 6 号、2008 年、pp. 25-30 (査読無)

6. 竹下政孝「イスラームにおける地獄の表象」『中東協力センターニュース』 32 巻 2 号、2008 年、pp. 58-62 (査読無)

7. 竹下政孝「イスラームにおける聖遺物」『中東協力センターニュース』 32 巻 4 号、2008 年、pp. 35-40 (査読無)

8. Shigeru KAMADA, "Transmigration of Soul (tanasukh) in Shaykh al-Mufid and Mulla Sadra," *Orient* vol. 40, 2008, 105-119 (査読有)

9. 鎌田繁「『コーラン』を読む」『いきいきトーク知識の泉 著名人が語るく知の最前線 > 2 古典への誘い』リブリオ出版、2007 年、pp. 151-223 (査読無)

10. 鎌田繁「正義とイスラーム的思考」『正義および人権に関する比較思想的考察 [課題番号 16320013] 平成 16 年度 ~ 平成 18 年度科学研究費補助金 (基盤研究 (B)) 研究成果報告書』研究代表者 宇佐美公生 (岩手大学教育学部教授) 2007 年、pp. 45-57 (査読無)

11. 柳橋博之「シャイバーニー『アスル』の編纂過程—カイロ写本「賃訳の書」の分析から」『法制史研究』 58、2009 年、1-45 (査読有)

12. 柳橋博之「アブー・ハニーファ讃を思想研究資料として利用するための基礎的考察」『日本中東学会年報』 23 巻 1 号、2007 年 pp. 197-212 (査読有)

13. 青柳かおる「ガザリーにおける二つの欲望」『駒澤大学佛教学部論集』第 39 号、2008 年、494-510 頁。(査読無)

14. 青柳かおる「古典時代と現代におけるイスラームの婚姻論比較研究—ガザリーとカラダーウィー」『史潮』第 63 号、2008 年、64-81 頁。(査読有)

15. 青柳かおる「ガザリーの「婚姻作法の書」にみられる妻と子供」『駒澤大学佛教学部論集』第 38 号、2007 年、47-62 (490-475) 頁。(査読無)

16. 青柳かおる「スーフイズムからみた結婚と性の問題」『多民族社会における宗教と文化』(宮城学院女子大学キリスト教文化研究所) 第 10 号、2007 年、1-23 頁 (資料 24-33 頁)。(査読無)

〔学会発表〕(計 5 件)

1. 竹下政孝 「ギリシャ政治哲学のイスラム政治哲学への影響—ファーラービーを中心に—」ギリシャ政治哲学の総括的研究全体研究集会 2008年9月28日 首都大学東京

2. 竹下政孝 「哲学史を読み直す—イスラム思想の視点から」日本哲学会 2008年5月18日 広島大学

3. Shigeru KAMADA “The Place of Mulla Sadra’s Kitab al-Masha’ir in Izutsu’s Philosophy” International Conference On Contemporary Scholarship on Islam: Japanese Contribution to Islamic Studies - The Legacy of Toshihiko Izutsu. 7 August, 2008 International Islamic University of Malaysia

4. 青柳かおる 「古典時代と現代におけるイスラームの比較婚姻論」中東調査会・日本イスラーム協会共催, 第11回イスラームとイスラーム諸国「理論と動向研究会」於日本記者クラブ大会議室, 2009年1月21日.

5. 青柳かおる 「イスラームの婚姻論—ガザリーとイブン・アラビー」早稲田大学オープン教育センター「ギリシアとアラビアの思想文化への導入」招聘講師, 於早稲田大学, 2007年7月23日.

〔図書〕(計 0 件)

〔その他〕

1. 青柳かおる 「イスラーム教の死生観」『応用倫理学事典』丸善, 2008年, 734-735頁.

2. 青柳かおる 「イスラーム教の他界観」『応用倫理学事典』丸善, 2008年, 744-745頁.

3. 青柳かおる 「読書案内—イスラーム思想史」『歴史と地理』No. 609(世界史の研究213), 山川出版社, 2007年, 45-48頁.

4. 青柳かおる 「イスラームにおける生命倫理」(翻訳)『生命倫理百科事典』丸善, 2007年, 第1巻, 57-65頁(Abdul Aziz Sachedina, “Bioethics in Islam,” *Encyclopedia of Bioethics*, 3<sup>rd</sup> ed., New York, 2004).

6. 研究組織

(1) 研究代表者

竹下政孝

東京大学・大学院人文社会系研究科・教授  
30163398

(2) 研究分担者

鎌田繁

東京大学・東洋文化研究所・教授  
70152840

柳橋博之

東京大学・大学院人文社会系研究科・准教授  
70220192

青柳かおる

東京大学・大学院人文社会系研究科・助教  
20422496

(3) 連携研究者